

平成 30 年度 東京都内湾水生生物調査 5 月稚魚調査 速報

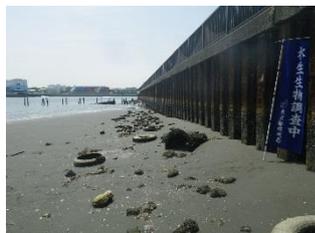
●実施状況

平成 30 年 5 月 1 日に稚魚調査を実施した。天気は晴れで、気温 28.0～29.6℃、調査地点の風は弱く、海は静穏であった。調査当日は大潮で、干潮が 11 時 46 分、満潮は 17 時 6 分であった(東京都港湾局のデータ)。

各地点とも、例年通りマハゼなどのハゼ類、スズキやボラの稚魚が多く採取された。

水生生物調査実施中！

稚魚調査中は、写真ののぼりを掲げています。見かけた方は、お気軽にお声がけください。



2018/5/1	城南大橋	お台場海浜公園	葛西人工渚
作業時刻	11:43-12:51	9:47-11:17	13:48-15:10
水温(℃)	22.9	20.3	23.1
塩分(-)	22.7	23.3	7.3
透視度(cm)	26.5	27.5	35.0
DO(mg/L)	13.1	14.4	8.4
DO飽和度(%)	171.4	181.9	102.1
波浪(m)	0.1	0.1	0.2
pH(-)	8.1	8.3	7.6
水の臭気	無臭	無臭	無臭
備考	干潟で潮干狩りをしていた方が 1 名いた(大型のホンビノスガイが獲れていた)。干潮～上げ潮時に調査を行った。	大型連休のためか、大勢の観光客(100 名程度)が公園を利用していた。下げ潮時に調査を行った。	調査中に、カワウやコアジサシ(4 羽程度)の群れが観察された。上げ潮時に調査を行った。調査地点では淡水の影響がみられ、塩分は低かった。

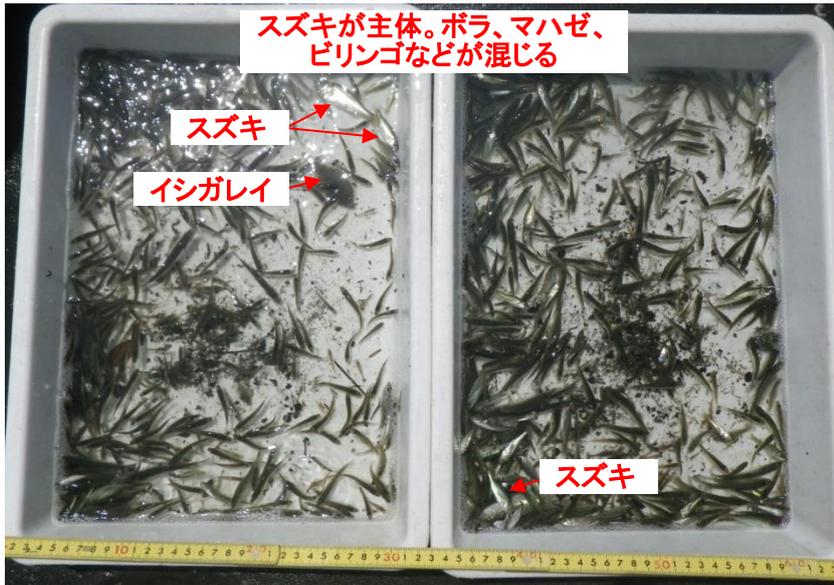
●主な出現種等 (速報のため、種名などは未確定)

主な出現種等	城南大橋	お台場海浜公園	葛西人工渚
魚種 (多い順 ^注)	スズキ(m)	マハゼ(m)	ボラ(c)
	ボラ(c)	ピリンゴ(m)	スズキ(c)
	マハゼ(c)	ウキゴリ属(m)	ピリンゴ(c)
	ピリンゴ(c)	ボラ(c)	エドハゼ(c)
	エドハゼ(+)	アシシロハゼ(+)	イシガレイ(+)
魚類以外	エビジャコ属(m) ユビナガホンヤドカリ(r)	エビジャコ属(c) ニホンイサザアミ(+)	エビジャコ属(c)
備考	他にウキゴリ属、イシガレイ、ヒメハゼ等が採取された。	他にスズキ、チチブ、イシガレイ、アサリ等が採取された。	他にヒメハゼ、カタクチイワシ、が採取された。

注) 表中の () 内の記号はだまかな個体数を表す。

G:1000 個体以上、m:100～1000 個体未満、c:20～100 個体未満、+:5～20 個体未満、r:5 個体未満

城南大橋 採取試料



スズキが主体。ボラ、マハゼ、
ピリンゴなどが混じる

スズキ

イシガレイ

スズキ



調査地点の様子



調査の様子

城南大橋西詰めにある干潟。
春の大潮時にあたり、調査時は、この
場所としては広い干潟がみられた。

●主な出現種等



スズキ

東京湾を代表する魚のひとつ。
ハゼ科稚魚や甲殻類を食べながら
急速に成長し、1年で20cm程度にな
る。成長に伴いセイゴ、フッコ、スズ
キと呼ばれる出世魚。



ボラ

内湾の干潟域では最も個体数の多
い遊泳魚である。
干潟域には、早秋から夏にかけて
滞在し、徐々に成長する。
稚魚の体色は、金属光沢が強い。



ウキゴリ属

稚魚は3~5月に干潟域に出現す
る。成長とともに川を遡上し、河川
の中流から河口域で生活する。
干潟域で見られる稚魚には、ウキゴ
リとスミウキゴリの2種が混じって
いることが多い。



ヒメハゼ

全長は9cm程度になる。内湾や河
口域の干潟域の砂底や砂泥底に
生息する。危険を察知すると砂に
潜る習性があり、体の模様も砂や
砂利の色にそっくりである。



イシガレイ

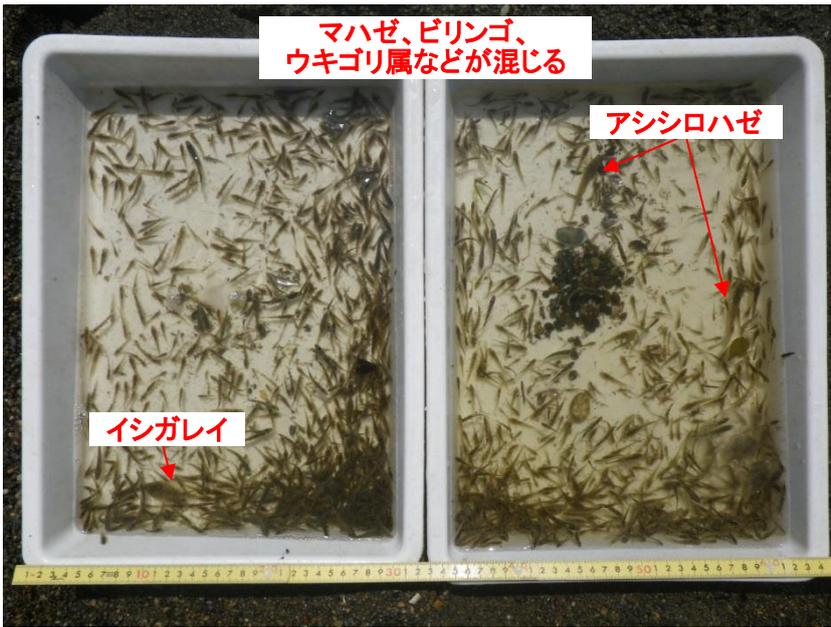
稚魚は干潟域などのごく浅い場所
に出現する。秋から春には湾奥に
分布するようになる。
体の模様は砂の色にそっくりである。



ユビナガホンヤドカリ

東京湾の干潟では、普通にみられる
ヤドカリである。潮間帯から浅海域に
かけて生息する。『海の掃除屋』的な
役割も果たしている。

お台場海浜公園 採取試料



調査地点の様子



調査の様子

レインボーブリッジの袂にある人工の渚。背後には、東京臨海副都心の高層ビル群がみえる。

●主な出現種等



東京湾を代表する魚のひとつ。内湾や河口域の砂泥底に生息する。稚魚は、初夏から秋にかけてゴカイや甲殻類を食べて成長し、徐々に深所へと移動する。



河口付近の干潟域で仔稚魚が3～5月に大量に発生する。稚魚が成長するにつれて河川上流側に移動する。早春にアナジャコ等の甲殻類の巣穴に産卵する。



湾奥から湾央の河口や干潟域で見られる。成魚は春になると干潟域に集中的に出現し、マハゼの着底稚魚を大量に捕食する。



汽水域に生息するアミの仲間(エビの仲間でない)。河口域で春に大量発生し、魚類等の餌として重要であるほか、佃煮やアミ漬として、人間にも利用されている。



潮干狩りなどで盛んに獲られている代表的な二枚貝である。東京湾のものは形が細くて、模様のコントラストが強いものが多い。



内湾の干潟に生息する巻貝である。死んだ生物の肉を食べる(腐肉食性)ことから、『海の掃除屋』などと呼ばれている。

葛西人工渚 採取試料



調査地点の様子



調査の様子

東京湾奥にある広大な人工干潟。東なぎさは一般の立ち入りが禁止されており、野鳥の楽園となっている。

●主な出現種等



東京湾を代表する魚のひとつ。ハゼ科稚魚や甲殻類を食べながら急速に成長する。葛西人工渚では、大きさの異なる稚魚が採取された。



稚魚は干潟域などのごく浅い場所に出現する。秋から春には湾奥に分布するようになる。体の模様は砂の色にそっくりである。



湾奥の干潟域に生息し、アナジャコ（Anajako）の巣穴がある砂泥地を好む傾向がある。アナジャコ（Anajako）の巣穴を隠れ家として利用している。小型の甲殻類を食べる。



東京湾の表層域では最も個体数の多い魚種であり、大きな群れをなして生活する。下顎が短く、上顎だけにみえることから、片口（かたくち）の名前が付いている。



内湾の砂泥底に生息し、普段はごく浅く潜って隠れている。体色は周囲の環境に合わせて変化する。魚類の稚魚などを捕食することが知られている。



※周辺で確認

砂泥質から砂質の干潟を中心に分布する。一般的なカニ類と異なり、横ではなく(前)に歩くことができるカニ。潮が引き干出した干潟の潮溜まりで観察された。